人乃声

photographs by Shiko Watanabe
text by Reiko Hisashima

お年寄りから赤ちゃんまで。障がい者もそうでない人も社会に参加できる場を。

NPO法人ドリームタウン代表理事／
板橋区議会議員

井上温子

Atsuko Inoue

東京・板橋区の高島平団地の
古い商店街の前でにこやかに笑うこの女性。
まだ20代ながら、板橋区議会議員であり、
NPOを主宰し、地域の交流拠点を開設した。
地域の人たちの力を、地域の中で
どう生かすのか。そんな課題に挑戦中だ。

❶超巨大団地、高島平の一角にある28-1号棟。その1階部分は、昭和の薫り漂う「イーストサイド名店街」で、理髪店や食堂、喫茶店、薬局、保育園が並んでいる。その中に、2013年4月にオープンしたのが、❷「地域リビング プラスワン」だ。

訪れたのはちょうどランチの時間。この日の「おうちごはん」の担当はゆっきーさんで、ママ友たち数人が赤ちゃん連れでゆっきーさんの手料理を食べている。その傍らで、配膳の手伝いをしたり、赤ちゃんをあやしたりしているのは団地に暮らすご老人“たくちゃん”。学生がふらりと立ち寄るかと思えば、近所でケバブ屋を営むイラン人ジャファリさんが、犬の散歩がてら立寄り、井上さんと立ち話をしている。

この「地域リビング プラスワン」をなんと説明したらいいのだろうか。食事もできるがカフェやレストランではない。フリーマーケットが行われ、英会話やマッサージもやれば、昭和歌謡や映画上映会といったイベントもある。関わる人たちが、自分のやりたいことをみんなで共有し、人と人とのつながりを広げていく、そんな“地域のリビング”なのだ。

地域づくりから区議会議員へ。

この素敵な場所を立ち上げた井上温子さんは、実は板橋区議会議員という肩書ももち、今は町づくりや地域活性化に積極的に取り組むが、大学2年生まではそうしたことに関心が薄かった。「ゼミで、高齢化が問題となっていた高島平団地ツアーに参加しましたが、そのときは団地にも、地域づくりにもあまり興味がわかなかったんです」。

そんな井上さんの意識が変わったのは、内モンゴルからの留学生に英語を教えた経験だった。「自分のスキルが人の役に立った初めての経験でした。遠いと思っていた海外や自分のやりたいことが、実は目の前にあることにも気づかされました」。

外国人だけではない。自分の周りに存在していた、高齢者や障がいのある人に目がいきはじめた。卒業後は、通っていた大学が高島平団地にオープンしたコミュニティ・カフェに参画。その運営を通して、高島平の町に一気に友人や仲間が増えていった。それと同時に、高島平地域への感覚が変わってきたそうだ。“住んでいる人の顔が見えはじめた”ことで、抽象的だった高島平という場所が、あそこには○○さんが、こっちには□□さんが住んでいるというリアルな場所に変わったのだ。

しかし、コミュニティ・カフェではいいことだけでもなく、メンバー同士の方向性の違いを調整するばかりで、現場の意見から遠ざかっていくのに疑問を感じていた。そんなとき、目にとまったのが選挙ポスター。「区議会議員って、なにをやっているんだろう?」。そんな素朴な疑問から、議員の仕事を調べると「地域の人たちの声を聞き、行政に提案したりチェックしていくこと」とあった。「なんだ、地域の人たちの声を聞くって、私がやっていることじゃん」。ちょうど地域にある廃校の跡地活用に、市民の声が反映されないことに歯がゆい思いを抱いていたこともあり、井上さんは区議会議員選挙に立候補した。2011年のことである。初めての挑戦で右も左もわからないなか、ポスターをつくり、恥ずかしさを抑えて街頭演説を敢行し、みごと当選。3720票を集めた。

「地域活動を始めて5年。活動を通してたくさんの友人、知人ができました。そうした人たちが、応援してくれたのかなと思い

❶超巨大団地、高島平

1972年から入居がはじまった巨大団地。総数1万戸以上と言われ、団地内に学校や公共施設、病院、商業施設などが整備され、団地を出なくても暮らせるほどの環境である。いっぽうで、一時期は自殺の名所とも言われ、近年では孤独死や少子高齢化などの問題も生まれてきて、あらためて地域の再構築が求められている。

❷地域リビング プラスワン

2013年4月オープン。地域の人たちが日常をシェアし、世代や国籍にかかわらず、お互いに支え合い、学び合う場として誕生。家のリビングにもうひとつプラスして、地域にリビングをという意味も名前に込められている。準備資金をクラウドファンディング「READYFOR?」で集め、88人のスポンサーを得た。

❸NPO法人「ドリームタウン」

高島平在住のメンバーを中心に、少しの工夫で、毎日がもっと楽しくなる新しい地域コミュニティをデザインすべく活動している。2011年に井上さんを代表として設立。高島平を誰もが輝く“Special Town”にし、その種を世界に蒔いていこうという壮大な目標を掲げる。

井上温子

いのうえ・あつこ●1984年東京都青梅市生まれ。2008年、大東文化大学環境創造学部卒業後、大東文化大学ハーベスト高島平担当職員に。11年、NPO法人「ドリームタウン」設立。同年、板橋区議会議員に無所属で当選。13年4月「地域リビング プラスワン」開設。

「地域リビング プラスワン」。食事や勉強会、ワークショップなどは、一段上がった小上がりで行われる。座布団に“座る”というスタイルで、赤ちゃん連れでものんびりできる。車椅子でも中まで入れるように入口は広くとっている。Bひと月の半分くらいは、料理をつくりたい人が手料理を会員に振る舞う「おうちごはん」で実施されている。C板橋区議会で質問に立つ井上さん。いつもの彼女とは違って(?)いたって真面目。井上さんが当選した選挙で、無所属で当選したのは彼女だけだった。「次の選挙では、同じ無所属の仲間が増えてほしいですね」。Dはじめての体験だった選挙運動の街頭演説。恥ずかしいし、どこに向けて話していいのか、かなりとまどったそうだ。しかし、街頭に立ち続けるうちに、「がんばって」など声をかけてくれる人がいたり、差し入れもってきてくれる人も現れた。E「地域リビング プラスワン」に、ほぼ毎日、ここでご飯を食べるとか。「地域リビング」だが、通っているうちに「我が家のリビング」のようになっていくそう。F赤ちゃんも居心地よさそう! 初対面でも声をかけやすい「地域リビング プラスワン」なら、お母さんがおしゃべりをしていて他のお客さんが赤ちゃんの面倒を見てくれる。G大きな窓が中と外との境目をゆるやかにしている。小さなフリーマーケットに誘われて立ち止まる人も。

誰もが誰かの役に立つ場所。

選挙活動のときに力を入れて訴えたのが、「地域の交流拠点を、53すべての小学校区に設置すること」だった。

「高島平には、住民同士のつながりがないわけではありません。しかし、人の役に立てたり、自分が主体となって活動できる場が少ないんです。地域には、高齢者や赤ちゃんを抱えたママ、障がいのある人、外国人など、いろいろな人がいます。そういう人たちが枠を超えて、互いにできることをし合える場が必要なんです。そして、そこで生まれた人と人とのつながりが有機的に広がっていけば、暮らしやすく、愛着の持てる地域になるのではないでしょうか」

言うだけでなくまずは実践、と始めたのが、❸NPO法人「ドリームタウン」が運営する「地域リビング プラスワン」。前述のように多くの人が集うが、昼間の居場所がなかった重度の障がいのあるあゆちゃんにとっても、ここは大切な場所になっている。ただ訪れるだけではなく、大好きな石けんづくりをみんなに教えることもある。誰もが誰かの役に立てる、そんな場所になっているのだ。

「板橋区には、同じような交流拠点がいくつかあって、地域のためになにかやりたいと考えている若い人もいます。行政は、もっとそういう人たちに目を向け、新しい力を活かして地域課題の解決をしていくべきだと思います。新しい地域の力を知り、役割を与えていけば、発展の余地があるのではないでしょうか」

声高に主張するのではなく、満面の笑みで相手の懐に自然に入り込んで、味方につける。そんなやわらかさ、しなやかさをもつ井上さん。最近では、「私も議員になりたいな」という声が周りから聞こえてくるという。「ゆくゆくは、私たち無所属から区長を出したいと大きな夢を掲げる。そのとき、板橋区